

常なる磐

つねなる いわ season II

令和3年10月8日(金)

◇ 朝会(ちょうかい)に思う

本校では、いわゆる「全校集会」を「朝会」と呼ぶ。古めかしいばかりか、教職員が行う「朝礼」と混同してしまいそうだが、命名時のいきさつと継続してきた経緯、さらに「朝会」の意味を自分なりに解釈した上で、この呼称を受け継いでいる。自分が本校に在任中も、おそらく変更はしないだろう。

本校の「朝会」は、毎月の第一月曜日の朝に行なっている。毎月1回の開催だが、多くの学校がそうであったように、昔は毎週行っていた記録が残っている。

コロナ禍にあって、多くの学校がTV放送等を使った代替方式で行っている中、児童間の距離をとりながらも児童と教職員が一堂に会して実施できるのは、本当にありがたいことだ。なぜなら、この「一堂に会する」ことこそ意味がある。

休み明けの月曜日はエネルギーが要る。心のスイッチを入れるエネルギーだ。時間帯は、寝起きと同様にもっぱら朝。これは、大人も子供も変わりはない。

月曜の朝は、登校時の児童の挨拶も何となく元気が感じられない。心のスイッチが入り切っていないのだ。受け手の自分も心のスイッチが入っていると切り切れないのが情けない。

けれどもパーンと強烈にスイッチが入る瞬間がある。月曜朝の朝会だ。体育館に入った瞬間に張り詰めた空気を感じ、心のスイッチがパーンと一瞬で入るのだ。

体操座りをしながらも腰骨を立てて姿勢を整え、無言で会の開始を待つ子供たちの姿が空気を作り出している。子供たち自身もそれを感じ、空気づくりを協力しようと頑張っている。この察知力。その場で育まれていく力だ。今では、1年生も同等の力をつけた。

そう。

「朝会」に参加することで心のスイッチがパーンと入り、ぱちっと目が覚める。体育館を出る頃には、目覚め、暖気された心によって体にも力が漲り、一週間のいいスタートダッシュが切れるわけだ。

大事なものは「一堂に会すること」。子供も伸びる。この意味は本当に大きい。



さて、「朝会」命名の経緯だが、これは予想の範疇となる。

時期までは絞られないが、古くは、学校の多くが「集会」ではなく、「朝会」で認識されていたのではないだろうか。「朝に全校児童が集い、行う会」ということ。

ざっと調べただけであるが、現在も「朝会」として行われている学校は、福岡小・大門小・夏山小・宮崎小・形埜小などがあり、歴史の深い学校が多い。

さらに、「集会」を調べると、

「何らかの目的があって、人を集めて行われる会合のこと」とある。「集会」に運動的要素を連想させる理由もわかる。

因みに、全校の児童・生徒が一堂に会するから「全校集会」。これに教職員が加わると「総会」になるとの解釈もある。そうになると、現在行っている「朝会」からずれる。「朝会」に連絡や講話はあるが、決議的要素はない。

視点を変えてみよう。「朝会」の別の読み方は「あさかい」。つまり「朝の会」。毎朝学級で行っている。よって、漢字で書く「朝会」を、全校児童が一堂に会するものを「ちょうかい」、学級で行う会を「あさのかい」として、読み方によって区別したと考えることもできる。

さて、本校でも毎週行われていた「朝会」は、月一回となってしまった。朝のドリル学習や中・低学年の英語活動など、やるべきことが増え、それに押し込まれる形で現在の形となったのだろう。けれども無くすのではなく、残っていることに「朝会」の意味が読み取れる。(※市内で朝会・集会のない小中学校は無い)

ここで問題となってくるのは、冒頭で述べた「心のスイッチ」である。

そう。担任が担っているのだ。月曜日の朝、小中学校の担任は、火曜日や水曜日とは異なる大きなエネルギーで子供たちと接し、心のスイッチをONになるよう子供たちを導いている。担任は大変…実はそうではない。月曜の朝、担任は教室で子供たちと顔を合わせた瞬間に心のスイッチが入る。つまり子供の力を借りるのだ。この見えない力を借りながら、担任は子供にお返しをしているのである。